

目的 家族関係教育の上で、学習者が自らの家族生活の中で、その基本単位であり、モデルである両親の関係(対話、権威、役割関係および結婚生活の満足度)を理論的にアプローチすることにより、より家族関係学習を定着させ、自己の家族形成を現実的、客観的にとらえさせることを目的とする。

方法 調査対象は、本学学生226名とその両親226組に、面接調査を実施。調査時期は1982年6月～9月。

結果 夫婦の対話関係の一致度をみると、双方が「よく話す」が30.5% (31.9%)、「まあ話す」20.4% (24.8%)、「普通」15.0% (11.5%)であるが、夫は対話があると考えるが妻はないとするもの3.9% (4.8%)で、この逆は7.4% (11.6%)であった。権威関係の一致度は「対等」が44.8% (41.3%)で、相互が「優位」で一致が8.8% (7.2%)で、「妻抑制」が16.3% (19.1%)で、「夫抑制」が5.4% (2.2%)である。次に役割関係の一致度は「よくする」10.2% (21.3%)で「普通」13.0% (26.1%)で、「あまりしない」10.2% (26.5%)、「全くしない」19.9% (25.7%)である。夫婦の対話関係は一致度が高く娘からみた両親の対話関係も同様なことがいえる。権威関係の一致度は低いがまず半数弱の夫婦は対等を認めている。それに対する娘の考えも同傾向である。しかし抑制している妻は2割近くで、娘は父にきびしく、母には同情的な数値が出ている。役割関係では夫の考えている協力感より妻のそれは低く、娘はさらに父の協力を否定的に見ているといえる。

(注) (%)は娘の数値